

コマドリの恩返し

唐緑意

(訳 横田勤・萩田麗子)

車は飛ぶように冬の国道を走っていた。ちらりと窓の外に目をやるとものさびしい殺伐とした景色が広がり、青いコマドリはまだいらっしゃっていないのがわかる。

三週間前のクリスマスの日、父が私にお手製の四角い鳥の巣箱をくれた。父はコマドリに夢中で、春が来るたびにいつも空を見上げて飛んでくるのを待っているのだ。しかし今年か、あるいは来年、再来年か、父の寿命はもう数えることができるぐらいに短くなっていて、美しい渡り鳥との再会を父が果たせる機会があるだろうか考えると、私は悲しくなってしまうのだった。

これは父の三回目の心臓発作だった。未明の三時、私が病院に駆けつけたとき、父はすでに意識不明に陥っていて、家族全員が死を覚悟した。父が一度目を覚ましたとき、母は枕元に座りしっかりと父の手を握っていた。父は母を見て、何やらブツブツと言った。「みんなが俺に手を離させようとしたが、おれが離さなかったんだよ。」母はそっと父の腕を撫でながら、優しい声で安心させた。「そうよ、そんなふうに手を離さないでいいのよ。」

父は鉋夫で、家族を養うためにずっと一生懸命働いてきた。これ以上は低くならないというほどの低賃金で働き、父と母は全部で六人の子供を育て上げた。私たちを一人前にするために、父と母がどれほど汗水流してくれたことか、今になっても私には想像することができない。

鉋夫の仕事は大変で疲れる仕事だ。しかし毎晩仕事を終えて家に帰ってくると、いつも父は嬉々として大工仕事にいそしんだ。家にあるたくさんの立派な家具は、すべて父の傑作である。父が大工仕事をしているとき、私たちはそばに立って見ていた。父は完璧に仕事をすることを求め、私たちにもそうすることを希望していた。実際、父のこの人生訓は、私たちの一生の座右の銘となった。

父は定年退職してからやっと、毎年春にやって来るコマドリのために巣箱を作りはじめた。そのころ私はある環境保護団体に参加していて、住民がコマドリの世話をしなければならないような環境になっているのがわかった。町が大きくなり工業化が進み、コマドリは身を寄せる場所を探すのが難しくなっていて、人工の鳥の巣に住むしかなくなっていたのだ。父は真剣に私の話を聞いていた。たびたびため息をつき、最後に、コマドリのために巣箱作りに取りかかることを承諾してくれたのである。

二週間後、父は私を工房に呼んだ。そこにはきれいに作られた方形の巣箱が三つ並んでいた。「鳥たちは、おれの巣箱を気に入ってくれるかな？」私は感激して父を抱きしめた。「こんなに親切なもてなしを受けたら、きっと我が家に帰ったような気分になるわよ。」それから私たちは、巣箱をあちらこちら軒下や木の枝の上に掛けた。

その年の春、真っ先に飛んで来たコマドリが庭に住みついた。父は彼らとだんだん友だちづきあいをするようになった。この鳥は希望と吉兆の使者であり、家庭の幸せと円満の象徴であると、父は確信していた。というのは、毎年一對のコマドリが二回から三回卵を孵化させ、早く生まれたそのヒナ鳥が大きくなった時、なんと両親のコマドリを助けて幼い弟や妹の世話をするのだ……コマドリの家が、いつも助け合いと理解と温かさに満ちているのは当然のことだ。

父の強い生命力は、一度、又一次と死に神に打ち勝った。早春の二月、父は退院した。家に帰った後、父がいつも嬉々とした様子で窓の前に立ち、長いこと庭のほうを見ているのに気付いた。ついにある日、夜明けの光がぼんやりとしている早朝、目にも鮮やかな一筋の青い帯が空にとつぜん現れ、一羽のコマドリが父の巣箱の上に舞い降りた。「ああ、小さな天使たちが帰ってくるに違いない！」父の目に優しさと嬉しさが満ち溢れた。

そのオスのコマドリの青い羽は、太陽の光の下でキラキラと光っていた。精巧に作られた人工の巣箱を占領したあと、コマドリは声を張り上げて高らかに歌いはじめた——それはまぎれもなくラブソングであった。それで私たちは、彼にカルロスという名を付けた。世界的に有名なイタリアのテノール歌手の名である。ほどなくして、案の定メスのコマドリが歌声につられてヒラリと飛んできた。だが隣の巣箱に住むことを選択した。カルロスはこの美しい連れ合いを見てからは興奮し、一日中彼女の周りをぐるぐる廻りながら歌い踊った。鳥たちの愛情は、

父の優しい視線を受けて大きく育っていき、同時に、父の体も徐々に健康を取り戻していた。私はそのとき思った。コマドリと父との間には、ひょっとしてある種の神秘的な関係があるのではないだろうか、と。

カルロスは自分の愛情を守るために侵入してきた別のオスと決闘し、メスのコマドリも突然やって来た恋敵と命がけの闘いを展開した。大戦の洗礼を経てメスのコマドリは、陽光がさんさんと輝く美しい早朝、羽をパタパタさせてカルロスの住まいに移ってきて、良縁を結んだ……青い空が映える中、カルロスの羽はことのほか明るい色をしていて美しいのが際立ち、声もさらに魅力的になっていた。一定の時間が過ぎ、メスのコマドリは卵を産みはじめた。毎日一個ずつ産み、全部で六個産んだ。母鳥が巣の中で卵を抱いている時に、カルロスは巣の外で警戒して見張りに立った。父はそれを見ていつも一言「ほんとうにいい奴だ！」と誉めるのを忘れなかった。ある時父は杖をつきながら木の下へ行き、距離を保ちながらこの鳥の夫婦と話をしていた。——彼はいつもきつく注意していた。「近くにより過ぎると驚かせてしまうからね。」

ひな鳥がついに殻を破って出てきた。カルロスはもう歌も歌わず、せわしなく子供のために小さな虫を探してきては腹を満たしてやった。私は感動して、突然思い至った。カルロスと父はなんと似ていることか。しかし父はカルロスのこの功労について、あれこれと言うことはなかった。五月の終わりのある日、羽が生えそろった小鳥は両親の指導の下、はじめて青空に向かって飛びたった。この世界にまた、何羽かの可愛い生き生きとした妖精が増えた。

しかし、父親は相変わらず、毎日早朝にベッドから起き上がるとすぐに庭に行き、いくつかの巣箱をじっと見つめている。今のところまったくの空っぽなのではあるが。「あいつらは戻って来る、きっと戻って来る！」父は自信に満ちた口調で言った。このような自信を持つことは父にとって久しぶりのことだった。さらに私たちは一家じゅうで驚いた。高齢の父が何といつの間にか杖を手放していたのだ！母は意味深げな口調で言った。「これはコマドリの恩返し。厚くもてなされたお礼に、あの人に生きる勇気と希望を運んできてくれたんだよ！」

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社, 南昌市, 2013, pp. 111-113.)



(中国語原文)

报恩知更鸟

唐绿意

汽车飞驰在冬日的公路上。瞥眼窗外，景色一片萧条肃杀，我知道蓝色知更鸟尚未光临。

三个星期前的圣诞节，爸爸给了我一个他亲手做的方形鸟巢。爸爸对蓝色知更鸟一往情深，每到初春，他总是面对天空翘首以待。不过让我伤感的是，今年，或者说在他屈指可数的余生，他还有机会跟这种美丽的候鸟重逢吗？

这是爸爸第三次心脏病发作了。凌晨3点我赶到医院时，他已陷入深度昏迷，全家人都以为他难逃一死。当他一度苏醒时，妈妈坐在床头紧紧握着他的手。他望着她，喃喃地说：“他们要我松开手，但我就是不松手。”妈妈轻抚着他的胳膊，柔声安慰他：“对，就这样不要松手。”就这样不要松手。”

爸爸是个老矿工，一生都为养家糊口疲于奔命。靠着他那份低得不能再低的薪水，他和妈妈一共养育了6个儿女。直到今天我都很难想象，为抚养我们成人，他和妈妈流了多少汗水！

矿工的工作既苦又累，但每晚下班回家，爸爸总还喜欢干上一点木工活。家里不少漂亮的家具都是他的杰作。当爸爸做木工活时，我们便站在一旁看着。他干活一向力求完美，也要求我们这么做。实际上他的这条人生法则也成了我们一生的座右铭。

爸爸是在退休之后，才开始为每年春天来临的蓝色知更鸟做鸟巢的。那时我参加了一个环保组织，了解到途经这里的蓝色知更鸟十分需要居民的照顾，城市和工业发展使得它们再也难觅栖身之所，只得在人工鸟巢里安家。爸爸认真地聆听着我的讲述，并不时叹息，最后他答应动手为它们做人工鸟巢。

两周后，爸爸把我叫到他的木工房——那里摆放着三只精致的方形鸟巢。“不知道鸟儿们会不会看上我做的巢？”我满怀感激地抱住他，回答说：“它们定会感到宾至如归。”然后，我们就把这些人工鸟巢分挂在屋檐下、树枝

上。

那年春天，最先飞临的第一批蓝色知更鸟就在他的院子里落户了。爸爸还渐渐跟它们交上了朋友。他认定，这种鸟是传送希望和吉祥的信使，也是家庭幸福美满的象征。因为他发现每年一对蓝色知更鸟都要孵育两三窝幼鸟，而那些较早出生的幼鸟长到稍大时竟然还会帮助父母去照顾更年幼的弟妹……无怪乎知更鸟之家总是充满了互助、理解和温馨。

爸爸顽强的生命力使他一次又一次地战胜了死神。早春二月他出了院。我发现他回家后总喜欢站在窗前，朝院子久久张望。终于一个曙光朦胧的清晨，一道耀眼的蓝带在空中闪现，一只蓝色知更鸟飞落在爸爸的鸟巢上。“啊，这些小天使也该回归啦！”爸爸的目光里漾满了柔情和喜欢。

那是一只公鸟，一身蓝盈盈的羽毛在阳光下闪闪发光。抢占了那只精致的人工鸟巢后它就开始引吭高歌——那无疑是支情歌。由此它还被我们戏称为“卡洛苏”，一个闻名遐迩的意大利男高音歌唱家。过了不久，果然有只母鸟循着歌声翩然而至，不过选择在相邻的另一只鸟巢里落了脚。“卡洛苏”见到美丽的同伴后激动不已，整日绕着它且歌且舞。鸟儿的爱情在爸爸温柔的目光中发展着，与此同时，爸爸的身体也渐渐康复。当时我就想，这两者之间难道存在着某种神秘的联系？

“卡洛苏”曾为捍卫自己的爱情而与另一只入侵的公鸟决斗，那只母鸟也曾与突然飞临的“情敌”展开殊死搏斗。经过大战的洗礼，母鸟终于在一个阳光绚丽的早晨，扑闪着翅膀，迁入了“卡洛苏”的“寓所”，结下了百年之好……在蔚蓝天空的映衬下，“卡洛苏”的羽毛显得格外亮丽，歌喉也更富魅力。又过了一段时间，母鸟开始下蛋：每天产一枚，一共产了六枚。当母鸟在巢中孵蛋时，“卡洛苏”就在巢外警惕地站岗，爸爸见了总不忘表扬它一句“真是好样的！”有时爸爸还会拄着拐杖，到树下隔着段距离和这对鸟儿对话——他坚持说，挨得太近会让它们受惊。

雏鸟终于破壳而出。“卡洛苏”不再唱歌，而是更忙碌地为子女寻觅小虫果腹。我在感动之余忽然想到，它和爸爸何其相似，不过爸爸对它的功劳

从未做过什么评论。5月底的一天，羽翼已丰的小鸟在父母的带领下第一次飞向蓝天，于是这世界上又增添了几个可爱活泼的小精灵。

而爸爸依然和以往一样，每天清晨一起床就走向院子，注视着那几个鸟巢，尽管眼下空空如也。“它们回来的，一定会来的！”爸爸说时充满了自信，而这种自信在爸爸身上已久违了。更令我们全家惊喜的是，年迈的爸爸竟然在不知不觉中扔掉了拐杖！妈妈意味深长地说：“这是蓝色知更鸟在报答知遇之恩——是它们给爸爸带来了新生的勇气 and 希望！”

